

## 第 26 期 農学委員会

### 第3回育種学分科会議事要旨

日時: 2024 年 8 月 15 日(木) 9 時~11 時

会場: Zoom によるオンライン会議

出席者: 磯部祥子、岩田洋佳、江面浩、菊池潔、木村恵、経塚淳子、佐藤豊、藤原徹、門田有希、八木信行、矢野昌裕、吉田薫

事務局: 増田能伸

配付資料:

資料1: 第 3 回分科会議事次第

資料2: 育種学分科会話題提供資料(菊池委員)

資料 3: 育種学分科会話題提供資料(木村委員)

議事.

#### 1. 話題提供 1: 「日本における水産育種学の現状と課題」

話題提供者: 菊池委員

菊池委員からの話題提供では、水産養殖の成長とその背景について議論された。特にノルウェーのアトランティックサーモンの成功は、選抜育種が主要な要因であり、世代ごとの改良で養殖効率が飛躍的に向上していることが強調された。日本では表現型選抜が主流であり、ゲノム予測技術の活用が遅れている。また、欧州や中国の進展に対し、日本の養殖業は規模と技術面で遅れをとっており、集中した取り組みが必要とされている。さらに、養殖技術や教育面での課題も浮き彫りになった。

#### 2. 話題提供 2: 「日本における林木育種の現状と今後の方向性」

話題提供者: 木村委員

木村委員からの話題提供では、日本における林業育種が取り上げられた。林木育種は、樹木の長い世代期間(数十年)や他殖性、大きなゲノムサイズといった特性が特徴である。日本では、1954年からスギ、ヒノキ、マツ類などを対象に精英樹選抜事業が開始された。生長の良い精英樹から第二世代が作成され、エリートツリーが選抜された。初期成育の良さが重要で、樹高は重要な育種目標である。また、無花粉スギの選抜やマツノザイセンチュウ抵抗性育種なども進行中で、ゲノム情報を活用した育種の高速度化が今後の課題である。近年では、県が行ってきた採種圃の管理が民間にも開放され、普及と開発の両面での進展が期待されている。

### 3. シンポジウムの開催方法について

今後の活動方針として、セミナーシリーズを中心に進めることが議論された。前期と同様に、Webベースで経費を抑えつつ、育種開発に関わる専門家を対象にしたセミナーを定期的で開催することが提案され、これにより、方向性が明確になった段階で学会との共催や現地でのシンポジウム開催を検討することが合意された。また、日本の将来を見据えた育種の方角性を見直しや、セミナーを通じて共通のメッセージを伝えることが重要であるとされた。次回の分科会では、セミナーシリーズの具体的な運用方法についてさらに議論を進めることが決定された。